

## 岸健太教授

### (アーバン・スタディーズ)

～都市をテーマに領域横断の旅を～

#### 想像力を駆使して答えを導くのが美大

自己紹介は、冒頭で職業や肩書きを述べるなどして自分の社会的立場をまず表明するものです。でもここでは、「話を聞きながら僕が何者であるかが少しずつ想像される」という形式です。おすすめです。聞き手である美大の皆さんにとっては、はじめに答えを知ってしまうことよりも、自分の想像力を駆使して答えを実体化させてゆくことのほうが、きっと楽しいと感じられるはずですから。

#### 「建築」は「建物」であるとは限らない

僕が学んだ東京芸大建築科では、在籍する学生の誰もが設計士になることを明確な目標としていましたが、僕は大学を卒業するまでついにそのような職業的ゴールを定められませんでした。

他のあらゆる大学の建築学科のものと同様に、カリキュラムは設計士を目指す人向けの「職業訓練的」なものでした。あらかじめ条件が定められた建築設計課題が与えられ、学生はそれをパズルのように解き、デザインの優劣を競い合うのです。

技術の習得は、のめり込んでしまえば楽しいものですし、設計士養成のためには学部での徹底した技術教育が必要であることも理解できます。でも、設計士を目指すことに関心をもてず、だからこそ「建築」の周縁や異端への関心が強まるばかりの当時の僕にとり、この「与えられた課題パズルを解く」4年間はまるで苦行のような日々でした。

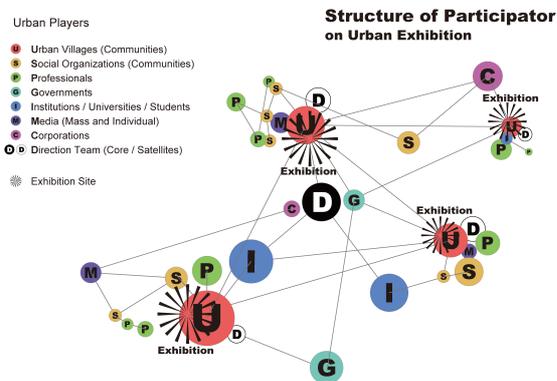
やがて「課題こそ自分でつくるべきもの」という欲求に導かれて、卒業後はアメリカにある「クランブルック・アカデミー・オブ・アート」という実験的教育の大学院大学へ進学します。

大学院では、もちろん「与えられる課題」はありませんでしたが、そのかわりに、『「建築」を表現する作業を「建物のデザイン」に頼りおこなってはならない』という厳格な条件が、2年間のスタジオワークに課されていました。「建物」は、「建築（という文化）」のほんの一部の表徴形式に過ぎないというわけです。「建物」のみでは表すことの出来ない「人と世界の関係」は山ほどあるという事実の中に僕らは常に放り出されていましたが、しかしそこにこそ、多様に異なる領域が「複合」して開拓する「建築のフロンティア」が広がっていたのです。この2年間のあいだに、僕の「建築」への関心は人が集合する社会的な場の仕組みである「都市」へと向かい始めていました。

## アーバン・スタディーズと4つの軸

それから今まで、世界の様々な都市で、デザイン、アート、学術研究、教育、アクティビズムなどの領域を架橋する活動に取り組んでいます。このような活動を、僕は「アーバン・スタディーズ」と呼びます。都市を素材としてスタディ（研究と実践）をおこない、そこに潜在する課題の発見から解決へ至るプロセスをデザインしているのです。

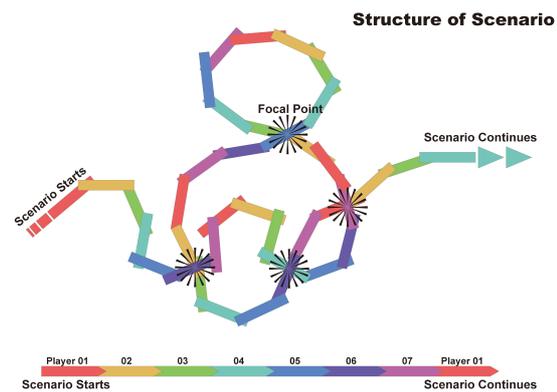
僕が実践している「アーバン・スタディーズ」の紹介としては、近年東南アジア都市で取り組んでいる活動が最適でしょう。アウトプットは、研究報告、展覧会ディレクション、ワークショップ、フォーラム開催、作品制作、書籍出版など、目的に応じて様々な形式・メディアを採用しています。



プロジェクトは以下の4つの活動カテゴリに基づくものですが、たとえばインドネシア・スラバヤ市のプロジェクトでは、この①～④が円環状に連続するプログラムを実施し、また別のプロジェクトでは、ひとつの活動カテゴリの成果に応じて

次の活動カテゴリが選択されるという自己生成型のプログラムを試みています。

- ① 従来の都市開発手法の批評と代替手法の提案
- ② 極小都市空間の生成と連鎖の観察・分析
- ③ 既存の都市共同体の持続メカニズムの研究
- ④ 現代都市の状況を誤読・再定義する活動実践



## これからのこと

今は、④の段階で「不在の空間」を検討・表現する活動に取り組んでいます。「どのような都市空間が私たちにより無視・放棄されてきたのか」、そして「私たちはそれをどのようにして再発見・再占有できるのか」という2つの問いが、都市に潜在する「不在の空間」を取り扱うための手掛かりとなります。観察や分析という研究的手法を用いて「不在の空間」に接近しつつ、現場の住民や関係者を巻き込みながら（そして僕らも彼らに巻き込まれながら）公共型のプロジェクトを実践し、得られた情報と人のネットワークをさらに次の段階の活動に適用・展開させてゆくこととなります。

この活動は、今年の春に「京都大学東南アジア研究所」というまさに多領域複合の研究機関が主催する国際ワークショップです。すでに実践していますが、今後はインドネシアやロンドンで計画しているワークショップや展覧会、そして秋美の近くの「新屋地区」で取り組みたい地域プロジェクトでさらに実践を重ねてゆきたいと考えています。

さて、そろそろ皆さんの中で様々な「岸健太」が想像されているころでしょう。秋美の大学院での皆さんとの交流が始まるまでは、そのどれもが仮説として正しいということにしておきましょう。